
兄の異世界譚

ポンカス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄の異世界譚

【Nコード】

N5358H

【作者名】

ポンカス

【あらすじ】

兄に倒錯した想いを抱く奈々華は、日常の何気ない時のなかで兄が放った一言によつて、異世界へと誘われてしまう。それでも兄とともに苦難を乗り越えていく内に兄の真意を徐々に理解する。「テングル国」という自分の知る日本とかけ離れた宗教国家で兄妹が奮闘するお話。

プロローグ

城山奈々華はいつごろからだろうと記憶をたどっていた。

奈々華には四つ年上の兄がいる。

奈々華は自分が兄に対して兄弟以上の情愛を感じているのを自覚していた。

いつごろからだろう。どうしてだろう。

兄は絵に描いたようなダメ人間だ。

高校生にして、パチンコ、麻雀、競馬といったギャンブルに手を染め、

停学処分は彼の通う高校の退学上限の四回に迫る三回。

タバコと酒は彼が中学生に上がる頃には既に必需品となっていた。

ここまで考えると将来を憂うカスつぶりだが、いいところもある。

奈々華は兄の顔を思い浮かべて思考を続けた。

兄は優しい。いつも優しく笑ってくれる。

理不尽なことで怒られたことはないし、自分のお願いもほとんど聞いてくれる。

おつかいにも行ってくれるし、ギャンブルで金を稼いだときなどは服や鞄を買ってくれたりもする。

兄は強い。いつも自分を守ってくれる。

奈々華が中学に上がって間もない頃、少々タチの悪い集団にナンパされそうになった時、兄が颯爽と駆けつけ、

その集団をのしってしまったことがあった。

あのときはかっこよかった。嬉しかった。

いつからかは結局わからない。

初めて会ったときからかもしれない。

奈々華は黒板の字を機械的にノートに書き写しながら、
兄の優しい笑顔を思い浮かべていた。

日常

「奈々華」

校門まで歩いて行くと兄は既にいた。

奈々華のナンパ事件以降、兄は自分の高校の授業が終わると、奈々華を迎えに来てくれるようになった。

兄は過保護かな、と言っていたが奈々華は嬉しかった。

「ごめん、待った？」

まるで恋人同士みたいだ。顔が緩むのを感じる。

「さっき来たところだよ」

「でも早かったね」

「ああ、俺数学嫌いだから」

サボった、と続くのだろう。

悪びれる様子もなく、仁は奈々華の中学の校門に背を預け、眠たげな目をこすった。

兄は自分の目元をあまり好いておらず、キツネ目だとか死んだ魚のような目、と称することがあるが、奈々華はその細長く眠たげな印象を受ける目が可愛らしくて好きだった。

コンクリートの白が仁の黒い学ランを汚す。

「サボってばかりいると留年しちゃうよ？」

「大丈夫だって」

何の根拠もなく仁が鷹揚に笑う。

大丈夫じゃないって、と言いかけて止めた。

何を言ってもこの不真面目な兄には馬耳東風。

嫌なことからは全力で逃げる、と常日頃兄は豪語している。

深いため息だけを吐いて、

「まあいいや。帰ろう」

と奈々華も笑顔を返した。

なんだかんだ言っても兄のこういう所も嫌いになれずにいる。

「おう」

先に歩き出した兄の背中を半歩後ろから眺めつつ歩いて帰る。

春の夕暮れは風が気持ちよく、夕日は幻想的だった。

兄が赤い夕日に、その細い目をさらに細めているのが目に浮かんで小さく笑った。

「この日常が続けばいいな」

奈々華は本気で思っていた。

唐突

奈々華は兄と父の三人家族だが、父は家に寄り付かない。実質奈々華と兄の二人暮らしと言ってもいい。

高校三年生の兄と中学二年生の妹の二人。

父は保護者として、毎月決まった額を口座に振り込んでくれる。だから生きているということだけはわかる。そんな程度。でも奈々華は現状の暮らしに満足していた。

「平行世界って信じる？」

夕食後のまったりとした時間に、兄がそんなことを言い出すまでは。「平行世界？」

奈々華は皿を洗いながら、ダイニングキッチンの向こう、ソファに座ってテレビを観ている兄にオウム返しに尋ねた。

家事は奈々華の仕事。兄も手伝うとは言ってくれるが、意外に不器用なため

かえって足手まといになってしまうのだ。

「そう。パラレルワールド」

「何？突然」

あとで構ってあげるから大人しくテレビでも観ていなさい。テレビには仁が贗品にする球団の野球中継が映っていた。

「俺も詳しくは知らないんだけど、量子力学っていう学問がある」

「もしもーし？」

「サイコロを振って仮に一が出たでしょう」

「……」

「でもサイコロで一から六が出る確率は同じだ」

「ならば二が出た世界も、三が、四が、五が、六が出た世界があってもおかしくはない」

兄は何かにとり憑かれたように、抑揚のない声で喋り続ける。

奈々華はひどく不安になった。

「サイコロは単純な例だけど、世界にはいくらでも起こりえたこと、選べたことがある。だったらその選択がなされた、

その出来事が代わりに起こった世界もあっていいはずだ」

大好きな球団のチャンスにも兄の目は虚ろだった。

そしてゆっくりとソファから立ち上がる。

「奈々ちゃんに今からその一つを見せてあげるよ」

歩み寄って奈々華の手を掴むと…

地面が揺らぎ、飛行機が離陸したような浮遊感を感じる。

視界が暗転する。兄の姿も消え、手をつかまれている感覚だけ。

奈々華は自分の意識が遠のいていくのを感じた。

信頼

顔を叩かれている。優しく、優しく。

撫でられていると言ったほうがいいような、いたわるような…

「奈々ちゃん。奈々華」

聞きなれた兄の声を耳に、見慣れたキツネ目を視界に捉えて奈々華は弾かれたように

起き上がった。起き上がってあたりを見渡した。

林道の脇。短い雑草が生えた草むらの上で横たわっていたようだ。

後ろには、雑木林と、驚いて細い目を見開く兄。

前方には、砂利を敷いた林道と、それを挟んで後ろと同じような雑木林が広がっていた。

「ここは…」

自分はまだ意識がはつきりとしていないのか？

自宅の台所に立っていて兄から珍妙な話を聞かされて、兄に手を掴まれて…

だめだ。何故こんなところで倒れていたのか見当もつかない。

「言つたろう？ 平行世界」

兄が草むらを出て砂利道に踏み出す。ジャリつとスニーカーの裏に小石が食い込む音が聞こえた。

「平行世界…」

気絶する前に兄が言っていた平行世界。

本当に？ そんなことが本当に？ 本当だとしてもどうして？

兄が自分を連れてきた？ どうやって？

疑問はいくらでも浮かぶが、言葉にすることが出来ずに黙り込んだ。

「そう。ここは俺たちがいた世界とは違う」

「でも…」

生えている木も砂利を敷く習慣も日本の片田舎のように…

「ここは地理上は日本ではあるが…そうじゃないな」

兄が砂利の中の一際大きな石を蹴飛ばして、妹を振り返った。

「説明するより見たほうが早い」

「……」

「混乱は最もだが、俺を信じてくれ。悪いようにはしない」

兄の目が珍しく奈々華の目をまっすぐに捉えた。

場違いにも少し心臓が跳ねる。

「…わかった」

まだ何の疑問も混乱も解消されてはいないが、いつになく頼もしい兄を見て、

奈々華は心のどこかが安心するのを感じた。

信仰

雑木林をしばらく歩くと、山間部の集落とも村とも判断しにくい規模の家々が見えた。

茅葺き屋根のぼろっちい軒並みは、やはり日本のそれらを彷彿させた。

家の数はせいぜい十といったところか。どれも似たような大きさだ。やっぱり日本じゃないの？と前を歩く兄の背中に言いかけたが、村の広場にある彫刻を見て口をつぐんだ。

大きさは一軒の家の半分ほどもあり、白く上質な石で出来ている。

天使を連想させるような鳥類の羽を背に、布を纏った人型の体。

しかし顔の部分は厳しい表情とがった牙、ちりちりパーマの頭髮からは

二本の角らしきものが飛び出していた。

鬼。にしか見えなかった。

「お兄ちゃん…アレ」

「ああ。テングル教の偶像だよ」

授業をさぼった報告と同じように、こともなげに兄が振り返って言った。

「テングル教？」

聞きなれない単語だ。日本にはそんな名の宗教は奈々華の知る限りではない。

「そう。この世界の日本では、神道も仏教もキリスト教も目じゃない。

テングルの神。てんぐるほんぞん天鬼本尊こそ信仰の対象なのじゃ」

仁が語尾を茶化して言い切った。顔もにやけている。

兄は大事なことを言うときこそ、本気でふざける。

「でも…こんな片田舎にまで」

「なんと国民の98パーセントが天鬼様に御執心なのです」

「そんな…」

自分が聞いたこともない宗教に、国民の大多数が帰依している。そんなことは考えられない。あるとしたら…

「この国ではテングル教徒以外は非国民。理解した？」

ここがなっちゃんのいた世界じゃないってこと」

そのくせ突然、ふざけた調子のまま核心をつく。
なっちゃんには信じるしかなかった。

伝心

「ごめんください」

兄が村の中では大きな方である、一軒の戸を叩いた。

年季の入った木造の家で、黒くなってしまった引き戸も仁の拳に体全体を揺らした。

ガラッと意外に滑りよく引き戸が開かれ、中から老婆が顔を覗かせる。

「すいません。ここらで車を調達できるような所はありませんか？」

仁が物腰も低く、柔らかい口調でその老婆に尋ねたが、老婆は訝しげな視線を仁と、後ろに

控える奈々華に向けるだけで口を開かない。

老婆のあからさまに友好的でない視線に目を伏せていると、

「実は夫婦で旅をしていたんですが、車を盗まれてしまつて…」

仁がとんでもないことを口走るのですぐさま兄を見遣ると、

眉を顰めたしかめっ面が返ってきた。黙っているという合図だ。

「そうかそうか。それは大変だったろうに。悪いことをするヤツもいたもんだ。」

千人会の仕業かのう？」

老婆が突然態度を豹変させて人のいい笑顔を見せる。

奈々華はまたしても聞きなれない千人会という単語の意味を仁に目で尋ねたが、

返ってきたのはやはりしかめっ面だった。

「かもしれません。ヤツらのやることは理解に苦しみます」

「そうだねえ。困ったもんだよ」

「それで車のことなんです…」

「ああ、そうだった。ここから東に三キロほど行つたところに海延町っちゅう町があつてな。」

そこでなら車も手に入るじゃろつて」

奈々華を置き去りに仁は老婆から情報を聞き出して、頭を下げた。

「それで千人会っていうのは？」

「俺たちで言うところのキリスト教かな。厳密に言うとき少し違うけど」

村をあとにして、歩き出した兄の隣を歩く。

聞きたいことや、特に話したいことがあるとき、奈々華は兄の半歩後ろではなく、

ぴったり横について歩く。それをわかっている仁も歩調を奈々華に合わせてくれる。

「千人会ってのは、文字通り信者が千人程度だからで、テングル側が使う蔑称だ」

「なるほど…」

仁が雑木林に飽きたと言いたげに、空を見上げた。

「じゃあさ…夫婦っていうのは？」

仁が顔を下ろして、奈々華を見る。振り子仕掛けよろしく奈々華が逃げるように顔を下げた。

「テングルの教えでは男女七歳にして兄弟でも異性は離れて暮らす」

「へえ。じゃあ私たちと逆だね」

奈々華が仁に初めて会ったのは小学校に上がる年だった。

それまでは仁は親戚の家に預けられていた。

だがあまり深い意味はない。気恥ずかしさから適当に言葉を紡いただけだったから。

「だから夫婦じゃないとなると、非国民の異教徒ってことになる。」

「いやだったか？」

仁が少し悲しそうに目を細めた。

「いや、別に私は、その…」

ずるいな、と奈々華は思った。

反骨

村と町の違いは何であろうか。ひょっとして店があるのとないはないだろうか。

海延町とかいう町は、先ほどの村より少し多く家が建ち、家も瓦屋根にはなっているが、

さびれた雰囲気と町の中央に安置された天鬼様は相変わらずだった。その中に田舎の工場といった表現がしつくりくるような、赤茶色に錆びた金属板に囲まれた

建物があった。開け放たれた金属の扉からは倉庫のような殺風景なつくりの中と、申し訳程度に置かれた機材や加工機器のようなものが見えた。建物横の駐車場のようなスペースには、それなりに形にはなっている自動車が数台置かれている。

「それではこちらのお車で…」

「はい、お願いします」

仁が店主らしき壮年の男と商談をまとめたようだ。

店主が汚らしいつなぎで手を拭くと、仁と握手をしている。

仁が買い求めたのは、奈々華の知識の中ではグレーのセダンと形容出来るものだ。

だが一体どうやって、仁は車を買えるほどのお金を持っているのか？先ほど店主に見せた、免許証らしきものはどうやって手に入れたのか？

仁は働いてもいないし、満十八にもなっていない。

まだ隠し事をされているようで、気に入らず奈々華は二人から少し離れた場所で

様子を見ているのだった。

「いんや、やっぱ快適でござるな」

仁が慣れた動作でアクセルを踏み、車は問題なく走っている。

「ござるな、じゃないよ。お兄ちゃん免許持っていないでしょ？」

「免許なんて飾りみたいなもんだよ」

違う。断じて違う。助手席から兄の横顔を睨んで黙らせる。

しばらく車の動作音と、開けた窓から車が空気を切る音だけが聞こえていたが、

仁が耐え切れなくなつたように、財布から免許証らしきものを取り出した。

見ると、自分の知るものと記入事項や大きさなどが異なるようだが、それらしい。

「偽造だけどね」

やはり。兄が法律を軽んじているところがあるのは前々から知っていたが、

実際に犯罪行為を平気でやってのけるとは。開いた口が塞がらないとはこのことか。

「免許証や金はある組織に用意してもらったんだ」

「ある組織？」

仁が珍しく真面目な顔になる。

「千人会」

それだけを言つて、仁はタバコを胸のポケットから取り出した。

道程

そもそもテングル教は、多神教であり、主神が天鬼と呼ばれる鬼である。

陰陽道などに見受けられる鬼の概念と、日本神話などで散見される多神教的側面が融合した

ものだと考えられているそうだ。歴代教祖には神通力のような超常の力が備わっており、

その座は世襲制ではなく、どこからか資質のある子供を現教祖が見つけて来て、いくつかの

審査を経て次期教祖に任命される。チベット密教の転生活仏に似ている、と兄は説明した。

そしてテングル教は古くから日本国民の信仰を集め、宗教国家を作り上げるに至っている。

一方千人会はテングル側から見た、いわゆる異教徒の一派で、日本にもその教えをもたらそうと、海外からやってきた一団だそうだ。

しかし土着の宗教と排他的なその教えにより、布教活動は思うような成果を挙げていないらしい。

「そこで俺が招聘されて、その類まれなる戦闘能力と若さで布教の手助けを

することになったんだ」

兄がわざとらしく自分の胸を叩いた。

若さはよくわからないが、実際仁は剣道、空手の有段者であり、特に剣道は去年の

インターハイ個人の部で優勝したほどの腕前だ。

「でも危なくないの？」

「まあ大丈夫だろう。俺がやっているのは戦力調査だから」

「戦力調査？」

また聞きなれない言葉だ。

「各地の支部の規模、首都部へのアクセス。戦闘要員、非戦闘員……」
「何のために？」

「革命」

今度は聞きなれてはいるが、穏やかな言葉ではない。

兄に説明を求める旨の視線を投げたが、兄はこれ以上語る気はないようで、

フロントガラスとにらめっこを始めてしまった。

兄の運転する車は海延町を離れ、数時間走ったところで山道に入っていた。

舗装どころか車一台が通るのがやっと、といった狭い山道が螺旋状に山頂まで

続いているようだ。タコメーターの上の時刻表示は夜の七時を回っていることを告げている。

街灯もない山道はおそろしく暗く、兄は前のめりになって目を凝らしながら慎重に運転

している。車のヘッドライトだけを頼りに車はのろのろと山道を進んでいく。

兄の集中を邪魔しないように奈々華も口を噤む。この深い宵闇に世界は包まれてしまつて、生者は自分と兄の二人だけになってしまつたような錯覚を覚えた。

「どこに向かっているの？」

少し沈黙が怖くなった。

「アジト……いや千人会の活動拠点」

ほら見えてきた、と兄が暗闇の向こう、僅かな明かりを指差した。暗闇の中にぽつんと蛍のような小さな明かり。目を凝らすと明かりの下にテントのような

ものが見える。奈々華と仁が安堵の息を吐いたのはほぼ同時だった。

強敵

薄茶色の布を張り巡らせたテントは、人が数人入るのがやっとのサイズで、

難民キャンプのように、ランプが吊るされた一つの周りに同じようなテントが点在していた。

ランプの点いたテントから金髪の女性が顔を出す。

年のころは兄と同じくらいか。金髪の髪に青い目。西洋人特有の筋の通った高い鼻。

きれいな女性だった。

「勅使河原さん」

兄がその女性に人懐っこい笑顔を向けた。

勅使河原？どうみても日本人には見えない。ハーフだろうか？

いや、そんなことはどうでもいい。この女性と兄はどういう関係なんだろう？

「随分遅かったですね…その子が？」

勅使河原と呼ばれた外国人女性が、奈々華にどこか好奇の混じった視線を送りながら言った。

「ああ、妹の奈々華」

「へえ」

女性の好奇が強くなった気がした。なんなんだ一体。

「奈々華。この人は勅使河原…」

「テセアラ・バーンと申します」

テセアラと名乗った女性が、日本人のように折り目正しくお辞儀をする。

奈々華も形だけのお辞儀を返した。語感が似ているから勅使河原。兄らしいくだらなさだ。

同時にまずいな、とも思った。兄は気に入った人間にしかあだ名はつけない。

視線のこともあり、奈々華はあまり良い感情を持てなかった。

「テントの中へ…」

誘われるまま兄と二人テントの中へと入っていった。

テントの中は小さな蠟燭にぼんやりと照らされているが、全体的に薄暗かった。

中央に小さなテーブルがあるだけ。食器が隅のほうに乱雑に転がっている。

「これが中国地方…やっぱり信仰心は篤いね。東京へは五時間弱。支部にはあまり有用な人間はいない」

兄が淡々としゃべる。戦力調査とやらの報告だということは奈々華にもなんとなく分かった。

「そうですか…ご苦労さまでした」

向かいに座るテセアラの顔は少し翳っているように見えた。千人会とやらからすれば、

兄からの報告内容が芳しくないのだろう。

でも彼女以上に自分の表情は優れないだろうな。自分がこの場にいる意味がわからない。

兄が自分の知らない女性と話しているのも気に入らない。

「妹さんも退屈でしょうし、今日はこのくらいにしておきましょう」

テセアラが奈々華を気遣うような言葉をかける。意外と人の感情の機微に敏い。

ひよっとするとこのような状況で出会わなければ印象も違ったかもしれない。

「そうだね。休ませてもらうよ」

テセアラに一言言って兄はテントを出ていった。

兄がいないのでは、こんなテントにもこんな女にも用はない。

兄の後を追って、奈々華も立ち上がりかけると…

「お兄さんはいつもあんな感じなんですか？」

とテセアラが抑揚のない声で言った。

「あんな感じ？」

「なんだか飄々としていて、掴みどころがない。そのくせいざというときは

敵じゃなくて良かったって思うほど頼りになる……」

テセアラの顔はどこか熱に浮かされたようだった。あえて言うならそれは恍惚。

しかし気に入らない。兄の何を知っているというのか。

兄にどのような感情を抱いているのか。

「そうですね」

ひどく投げやりな返事を返し、奈々華はテントを後にした。

気尽

「奈々華、テントはどうしよう？俺と共用になるか、さっきの勅使河原さんになるか」

テセアラのテントを出ると、奈々華を待っていた兄が聞いてくる。一考の価値もない。

「お兄ちゃんと一緒にいい」

仁はふっと笑うと、奈々華に背を向けて歩き出した。

この鋭い兄は妹がテセアラに良い感情を持っていないことに気付いているように見えた。

後姿の兄が右手でばりばりと頭を掻いている。困ったときの癖だ。

兄の話によると自分たちが今いる場所は、広島県の山間部に当たらしい。

ちなみにここから見た外国、つまり千人会隆盛の場所ではかなり科学技術が発展しており、

時空転移装置なるものも発明されていて、自分たちをここに連れてきたのも

そのの仕業らしい。都市部から随分と離れているのは、それだけテングル教の影響力が

強いからとのこと。左翼のレジスタンスみたいだな、と兄は揶揄した。

左翼というのは、兄の言った革命とやらに関係があるのだろうか。

「革命って何をするの？私はどうして呼ばれたの？」

言って今更だなと思った。実際のところ興味はなかった。

兄が信じると言った以上、自分に損になるようなことはしないはずだ。

久しぶりに兄とひとところで寝る高揚を抑えるために聞いてみただけだった。

「革命…テングルをひっくり返して、異教の神を民衆に勧めようってんだから革命だろ？」

君を連れてきた理由は…おいおい分かるさ」

含みのある言葉だったが、無理に聞こうという気にはならなかった。兄が一緒なんだから大丈夫。ある意味自分は兄を信奉していると言っても過言ではない。

「ところで…」

仁が珍しく言いよどむ。

「？」

「ところで奈々華は処女か？」

「は？」

兄の言葉を脳内で反芻する。処女？何故そんなことを聞く？

「えと…そうだけど」

「そうか。それは良かった」

兄が少し照れくさそうに、嬉しそうに笑う。

奈々華は鼓動が高鳴るのを聞いた。

「今日はもう遅い…寝るか」

一つしかない毛布を見つめ、奈々華は顔が赤くなるのを感じながら頷いた。

もしかして兄も自分と同じ気持ちなんだろうか。両想いだっただのか。「その…まだそういうのって早いっていうか…」

兄は自分をそういう対象と見ているのか。そういう行為に及ぼうと思っただけなのか。

高揚と動揺で眩暈がしてくる。

兄が動く気配がするが、顔を上げるふんぎりがなかなかつかない。何を躊躇う必要があるのだろうか。ずっと願ってきたことだろう。

決心して顔を上げると、兄は既に毛布も使わずにテントの隅でいびきをかいていた。

「なんなの、一体？」

テントに吹き込んできた山の夜風が、兄の前髪を優しく揺らした。

子供

「でも私は今日から何をすればいいの？」

何故連れて来られたのか追求する気はないが、行動の指針くらいは示して欲しい。

ちなみに昨晚のなぞの言動も追及しない。恥ずかしくて忘れたいくらいだ。

「俺と行動を共にしてくれたらいい」

地べたにテントの布一枚という劣悪な環境で眠ったにも関わらず、兄は元気そうだ。

「うん。わかった」

「ついでに勅使河原女史も一緒だ」

一気にテンションが下がるのを感じた。

兄の運転する車は、兄妹とその他一名を乗せてスムーズに山道を下っていく。

「今日は関東支部に行くの」

テセアラは奈々華の敵対心に気付いていないのか、気付いていてあえて気さくに接しているのかはわからないが、車に乗る前からずっと奈々華に笑顔を見せていた。

「はい」

兄から聞きました、と言ってやりたい衝動は奈々華の良心が辛うじて抑えた。

「ごめんね、奈々は人見知りするんだ」

「そうですか：カワイイですね」

あなたに褒められても嬉しくない。第一これは人見知りじゃない。大人げないなとは思いつつも、窓の外に顔を向けた。種類もわからない木々がゆっくり流れていく。

「困ったもんだよ」

後部座席からくすくすというテセアラの忍び笑いが聞こえてくる。
奈々華はしかめっ面が映らないように、開閉ボタンを押して、窓を開けた。

「でも仲が良くていいですね」

テセアラと兄は、すっかり無口になってしまった奈々華をよそに会話を続ける。

「そうだな、仲はいい方じゃないかな」

なあ、と言って兄が頭をぐりぐりと撫でてくる。顔が緩むのを必死に抑えた。

兄は必ず、会話に入ってこれない人間にさりげなく話しかけたり構ったりする。

そういうところも奈々華は好きだった。

「昨日だって同じテントで…」

「お兄ちゃんお茶」

蒸し返すな。一人で舞い上がったことを思い出してしまう。本当何だったんだよ。

兄が苦笑しながら水筒に入っているお茶を、片手でやりにくそうに紙コップに注いだ。

「でも家族を大事に出来る方って素敵です」

それはそうだ。並の兄なら自分でやれと言っただろう。不機嫌な妹に気を配るのを面倒くさがるだろう。テセアラもたまには良いことを言うようだ。

「そうか？じゃあ結婚するか？」

兄の冗談は冗談にならない時がある。お茶を慌てて飲み干す。

「え？えっと…」

バックミラー越しのテセアラの頬が朱色に染まる。

「お兄ちゃんお茶！」

返事に戸惑っていたテセアラも、冗談だと言いかけていた兄も黙ってしまった。

単純

奈々華達のいた日本でいうところの山梨にあたる場所に千人会関東支部があるらしく、

そこでテセアラを降ろすと、近隣で戦力調査とやらを開始することになった。

テセアラは一目で外国人だと分かるため、二人でやらなければならぬらしい。

奈々華としては非常に助かる上、兄と二人きりなのだから文句はないが、

兄は不満であるらしかった。また頭を掻きながら渋面を作っている。「どうしてあんなに突っかかるんだ？」

それをあなたが聞きますか。私に言えと言いますか。

沸々とやり場のない怒りが湧いてくる。いつそ言ってしまうのか。

兄が好きだからです。兄を取られたくないからです、と。

「まあ気付いてはくれないよね……」

本当のことを言う勇氣がない奈々華の、精一杯の抵抗だった。

「風強いな」

手で覆っているにも関わらず、兄のジッポライターの火が、風に激しく揺られている。

「聞けよ」

「え？」

苦労の末タバコに火を点けることが出来て、兄は嬉しそうに微笑んでいた。

戦力調査とは、来たる革命の日によりスマートにテングル教を失権させるために、各地の

信者の数や状況、支部からの本部増援にかかる時間などを調べることが主目的である。

というのも千人会は無血革命を目指しており、また布教に際しても個々人の自主性を

重んじて行いたいという、慎重かつ道徳的な方針を掲げているらしいのだ。

「でもとつくに調査しているんじゃないの？」

ここは都心部に近い関東地方だ。第一に調べるべきだろう。

「彼女達は一目で外国人だと分かってしまう。もし顔を特殊メイクなんかで細工しても

文化が違いすぎるからね。外国人イコール千人会だと認識されているからバレることだ」

それで比較的文化も風貌も似通っているであろう、日本人の仁が来るまで迂闊に動けなかったということか。

「あとは関東と東北。北海道は遠いからいいだろうってことでこの二地域で終わり」

「終わったら？」

「革命」

短くなったタバコを踏み消しながら、兄が事も無げに言う。

奈々華はぶるつと身震いした。無血革命とは言え、時代の転換期になるであろう事件に

立ち会うことになるかも知れないのだ。それに血が流れない保障もどこにもない。

自分と兄はそんなことに加担している。そう思うとそこはかとなく怖くなった。

「大丈夫。血を見ることにもならないし、きっと良いことになるよ」

俺を信じろ、と再び頭を撫でられる。何にも事態は変わっていないのに、それだけで、

恐怖が消えてゆき、安堵に胸が満たされるのを感じた。

妄信

街角の交通量調査みたいなものだった。道行く人々の格好からその信仰心のあるなしや

その深さを測っているそうだ。例えば若者は信仰心が薄く、自分達のいた世界とさほど変わらないチャラチャラした服を着ていることも多く、シンボルである偶像を模した鬼の角のペンダントをつけていない、もしくは少しアレンジした色形のものを首から提げていたりする。

逆に年配の人間はきちつとした服装か、袈裟ともローブともつかないテンプル教が定める、信者の正装で歩いている者もいる。当然ペンダントも原型そのままで首にかかっている。

それぞれの数を、目立たないように両手に持ったカウンターでカチカチやっているわけだが…

「ねえ、退屈じゃない？」

「発狂寸前だね。全部殴っておとなしくさせるか…」

兄がタバコを乱暴に踏み消し、おもむろに立ち上がる。この人はやりかねない。

「もうちよつとで千人だから、落ち着いて」

千人が言いつけられた、計測人数だそうだ。

「大体俺にはこういう地味な作業は向いてないんだ」

渋々腰を下ろして再び往来に目を向けてくれた。間髪入れずにタバコに火をつけるくらいは目をつぶろう。逆に奈々華は内心なかなか面白いな、と感じていた。

宗教国家と言えど、その信仰心には個々人開きがあり、服装など目に見える形でそれが顕れている。

時折年配の人間が、若者に理解しかねるといった視線を向けているのも、国や宗教だとかいったバックボーンが違って、人の本質が

変わらないことを教えてくれるようで妙に奈々華を安心させた。

「何か安心するだろう？ここ」

「え？」

さっきまで人を殴りつけ、動きを止めて計測しようとしていたのに、どんな心境の変化だ？

「テングルは情報統制や経済介入なんかもやる、社会主義的なところがあるんだけど…」

人は皆純朴で、憎めない」

「そうだね」

さっきまで自分が思っていたことを、実は兄も感じていたのか。

男女別々に暮らす掟もあって、ベンチに並んで腰掛ける自分達はさしずめ若い夫婦と見られるらしく、計測を始めてから何度も、老若男女問わず、ものをくれたり、話しかけてられたりしていた。

「トマス・モアの描くユートピアは孤島が舞台だったし、ネオリベラリズム経済はチリに格差社会をもたらしたただだった」

「……」

「人が暮らしていくのには、何か、何でもいいから信じられるものがあればいいのかもしれない。たとえそれが妄信であつたとしてもそれは人の支えになる」

兄は宗教には懐疑的な姿勢をとっていた筈なのに。どんな心境の変化だ？

ひょっとしたら兄は自分と同様に、奈々華にも視野を広げて欲しいという思いからこの世界に連れてきたのだろうか。もしそうなら兄は知らないが、それは必要ない。

自分には信じられるものが一つだけある。妄信とは呼びたくないものが一つ。

少し熱く語ってしまったせいか、照れくさそうに笑う兄の顔を見つめた。

全幅の信頼を瞳に込めて、兄が少し本音を語ってくれたことに喜びを込めて。
いつも飄々としている？あなたがまだ兄のことをよく知らないからだよ。
ほんの少しの優越感は、熱に変わって。

相似

「次はテングルの山梨支部なんだが…これを渡しておくよ」

兄がポケットから取り出したのは少し折れ曲がったプラスチック製のカードだった。

一番上に城山奈々華と表記されている。家族の欄に夫、城山仁とある。

何度目でも感慨深いものがあつた。あちらの世界では民法が変わらない限り、有り得ない表記だ。いつそこちらの世界に永住してやろうか。

「…って、身分証明書でしょ？どうしてキチンと保管できないの！？」

信じられない。よく見ると信者票と書かれた題目の先が折れている。

「大丈夫だよ、見えりゃ。どうせ偽造だし」

「……」

全くこの兄は、世に流布されるO型の特徴を体現するかのような性格だ。

「それより夫婦って設定なんだから、ラブラブっぷりを前面に押し出して手でもつないで

カチこむか？」

結局兄の提案を聞くや否や、しょうがないなあなどと呟きながら、全力で手を繋いでしまう

自分も兄のことは言えない位に単純なのかも知れないな、と思った。

テングル教の支部は、想像を裏切らない厳かな雰囲気で、寺とも神社とも違うが、和を感じさせる建物だった。一見すると木造の古い家屋のようだが、仏閣と変わらないような大きさと、

門扉までの距離も少しある。その空間には芝生が茂っており、中央に芥子で編まれたような縄が敷かれ、門まで続いている。これを道

代わりにしろということか？

「踏んじゃダメだよ」

その縄を踏みつけて悠然と闊歩する奈々華を、兄が引つ張った。

「え？」

「神社と一緒にそこは天鬼様を通られる道なんだ」

兄はわざと仰々しく言う。テングル教徒として振舞っているのだから当然か。

「ねえ、そういうのは先に言ってくんない？」

テングル教会山形支部の中は、エアコンやテレビといった文明の利器も点在しており、奈々華は少し興が殺がれる思いだった。だが今の日本の仏閣を思えば過度の期待は禁物か。

それ以外は畳が敷き詰められ、忙しそうに職員達が右往左往する中、でんと畳の上で胡坐をかいている、剃毛しているわけではないが、大分頭の禿げ上がった男もそれらしかった。

その男性は仁を見るなり、商人のような人のいい笑顔を見せて近づいてきた。

「それで妻と全国行脚しているわけですが、天鬼京に行くにはどの道が近いでしょうか？」

兄によると夫婦で全国行脚するほど、自分達は敬虔なテングル教徒であるらしい。

天鬼京というのは、自分達の日本での東京にあたる場所だそうだ。ちなみに比較的日本の中でも天候が安定しており、なおかつ地理的にも中心、千人会が渡航してくる前は最大の脅威であった中国、韓国から遠い太平洋側に位置する場所であることなどから、首都機能を置かれているらしい。

「それはお若いのに熱心なことですね」

呼称は分らないが、施設の最高責任者らしき中年の男が嬉しそうに二、三度頷く。

上下する禿げ上がった額が、照明を跳ね返していた。

「それで、早く本尊を拝見したくこちらで道をお聞きしようと思ひまして…」

「ああ、それでしたら鬼頭本線をお使いになられるとよろしいですよ」

「所要時間はいかほどでしょうか？」

「そうですね…一時間程度でしょうか」

奈々華にもかなり短時間で首都まで行けることは分かった。本部に革命の火の手が上がったと連絡が入って、ことの最中に増援に駆けつけられてしまうほどの早さだということも。

兄は胸中穏やかではないはずだが、それをおくびにも出さず対応の中年男性に礼を言つて席を立った。

辟易

山梨県の、これまた山間部にあるテント群に辿り着いたのは、日の暮れかかった午後五時を過ぎた頃だった。辺りには人気はなく、人を埋めていても見つかることはなさそうなくらい辺鄙な場所。隠れ潜むように、山の中腹に構えられたテント群はなんとも物寂しかった。

まずはテセアラを探そうということになり、テントの間をうろちよろしたが見当たらない。

「ウンコかな？」

さすがに女の子に対して無粋が過ぎる兄をたしなめようと、水筒を振りかざした時、

「おお、君が仁君かい？」

少女の声がした。振り返るとそこには茶髪の女の子が立っていた。色白の肌にそばかすが見えるものの、やはり外国人然とした鼻の高い整った顔立ち。

ややあどけなさが残るその風貌から、奈々華と同じくらいの年恰好だと判断できる。

「そうです。テセアラさんのお友達ですか？」

友達という呑気な表現が兄らしいと言えるが、少し場違いに響いた。「そうだよ。テシーはお手洗い。あたしのテントで待つといいよ」

兄が親指をつき立てて見せる。まだウンコかはわからないだろうに。

「あたしの名前はリジット・エヴァンス」

そばかすの少女が親指をつき立てながら自己紹介をする。どうやら兄がするのを見て、気に入ってしまったようだ。リジーと呼ぶのさ、と息巻いている。

リジットことリジーは、千人会の中ではそれほど重要なポジションではなく、専ら日本での活動はこの山梨ベースでの雑用なのだそう

だ。仁のことも仕事で知っていたわけではなく、友人のテセアラから聞いていたという話だった。

「テシーのヤツ、仁のことそれはもう嬉しそうに話すからさ…あたしも興味深々なわけよ」

「はあ」

「あいつアンタに気があるのかもね。今度かまかけてみるといいよ」「考えておきます」

「でもさあ、蓋開けてみたら全然普通の男じゃん？」

「そう言われましても…」

兄はほとほと困ったという様子だった。敬語も崩さないところを見ると、このしゃべり続ける少女を苦手と判断したらしい。奈々華としては、ひとまずは安心ということになる。

しばらくして、テセアラがテントにひょっこり顔を見せたのは、兄の少女に対する相槌もかなり適当になってしまった頃だった。奈々華自身も優しく接してやった自信はない。

「随分と盛り上がってますね」

苦笑交じりのところを見ると、テセアラも本気で言っているわけではないようだ。

「ああ、有難いお話を頂戴していたところだよ」

兄の皮肉に、テントの入り口から差す夕日を背負ったテセアラが苦笑を濃くする。

「テシーが仁にホの字だって話してたんだ」

途端にテセアラが夕日に負けず劣らず、顔を朱色に染める。なにを、そんな、などと呟いているが、凶星を突かれているのは火を見るより明らかだった。

恐る恐る兄を見遣ると、微笑ましいものを見るように穏やかに笑っていた。

何を考えているのか分からない。照れるでも、嫌がるでもなく、ただ笑っている。

奈々華は、混乱と焦りが胸を締め付けるのを一人感じていた。

拒否

雑木林には広葉樹が所狭しと立ち並んでいて、地面は柔らかい土で形成されている。

腐葉土というやつか、とぼんやりテセアラの後ろ姿を目に入れながら思った。

振り返るとテント群が、少し小さく見えるところまで山を登ってきたようだ。

「すいません、こんなところまで連れ出して」

テセアラが顔だけ振り返った。帰ってきて報告を終えた仁は眠ってしまい、退屈をしていたところに、テセアラから話があると言われ、テントから連れ出されたのだ。

「いえ」

濃い緑の匂いが鼻腔を満たし、その場で深呼吸をしたい衝動が湧いた。

テセアラが立ち止まったのに追いつくと、木が切られて切り株だけが残った空間が広がっていた。どうやら目的地らしい。本当に誰にも聞かれたくない話なのだろう、と推測できる。

「静かな場所でしょう？」

自分がこんな静かな場所まで連れてきたんじゃないか。

「そうですね」

人の気配はおろか、周囲には動物がいる様子すらない。遠くのほうで鷲だか鷹だかが甲高い声で鳴いているのが聞こえるばかりだった。二人して切り株に腰掛ける。はたから見れば仲のいい友達にでも見えるかな、と頭の中の呑気な部分で思った。

「私はあなたのお兄さんが好きです」

半ば予想していた言葉だったが、弾かれたように奈々華は地面から

顔を上げた。もう先の一件でバレたと分かっているのか、恥らうようだがどこか堂々とした雰囲気も声からは感じられた。テセアラの白色人種らしい、真っ白な顔が今はほんの少し赤い。

「……」

「実は、仁さんと呼んだとき、迎えに行く最中あちらの過激派に見つかってしまつて……」

「それで？」

「助けてもらつたんです。瞬く間に全員昏倒させてしまつて……すごかつたです」

テセアラはその時のことを思い出しているのか、顔に恍惚の色を浮かべていた。

「それで好きになつたと？」

そんな、ヒーローに憧れるような単純で稚拙な想いで……

「それに助けてもらつた後、仁さん言つたんです……もう大丈夫だよつて。心配ないよつて。」

優しい声で……まだあの時は味方なのかも分からないのに胸にストンつて落ちるような……

「もういいよ。わかつた」

聞くに耐えない。見るに耐えない。奈々華は再び地面を見据えた。

「私にそんなこと聞かせてどうするの？」

自分でも驚くほど冷たい声音だった。

「えと、その……上手くいくように手伝つて頂きたいんです」

「いやだよ」

「え？」

「いやだつて言つてるの」

はつきりと拒絶の意思を瞳に込めて、奈々華はテセアラを真っ直ぐに睨みつけた。

家族

城山家の家庭事情は少々複雑で、奈々華と仁が初めて互いに顔を合わせたのは、奈々華が小学校に上がる歳のことだった。奈々華の母親が他界した年でもあった。

仁は二人の父である、大和と名も知らぬ女性との間に生まれた子だ。その女性は仁を産むと、大和との関係を断ち、親権も譲ってしまったそう。つまり仁は自分の母親の顔を知らない。望まれた子ではない、と仁が一度だけ自虐したことがあるのを覚えている。

よって奈々華の母佐奈と仁に血の繋がりがなく、奈々華と仁は異母兄弟となる。

仁が親戚の家に十歳まで預けられていたのは、そういった事情もあったことだった。

そして母の死に合わせるように、仁は十一になる年に奈々華の住んでいた家に来て来た。

父は母の葬儀が終わると、家に寄り付かなくなり、実質二人暮らしが始まった。

仁は母を亡くし、悲嘆に暮れていた当時の奈々華を懸命に元気づけてくれた。常に気にかけてくれていたのは幼心でさえわかっていたが、今思えば冷たくあたったり、心無いことも言った。それでもいつも傍にいてくれたし、優しい言葉をかけ続けてくれた。

その優しさに、心を救われたと信じている。

今の自分があるのは兄のおかげだと心から思う。

今になって母の盲目的な自分への愛は、ひよつとすると家庭をかえりみない父への母なりの当てつけだったのかもしれないと思う。また自分の家族が娘しかいないことで、愛さなければいけないとい

う、ある種強迫観念のようなものまで母は抱いていたのかもしれない。
そして自分は子供心にその機微を敏感に感じ取っていたのではない
だろうか。
だから共に過ごした年数は同じなのに、母よりも強く兄に依存して
いった。

やがて傷心もいくらか癒えてくるころには、兄は自分の全てになっ
ていた。

兄の行くところをついてまわり、兄の背中ばかりを見ていたのを記
憶している。

家にいるときも片時も離れるのが嫌で、ずっと兄の膝の上に座って
いたのを覚えている。

兄が来てからは楽しい記憶ばかりだ。

初めて焼いたクッキーは半生だったのに、美味しいと言って全部食
べてくれた。

遠足で一日離れるのが嫌で、ダダをこねたときは結局兄に遠足を休
ませてしまった。

友人の妹だという同年代の女の子を紹介され、自然と仲良くなれた
のも、今思えばなかなか友達の出来ない奈々華を見かねて手を焼い
てくれたのだろう。

思い出せばきりが無い、大切な兄との記憶。いつも笑っていたよう
な気がする。

兄がどうしようもなく優しいから。兄がどうしようもなく好きだか
ら。

暴露

「どうして嫌なんですか？」

テセアラの疑問も最もだ。兄が恋人を作る絶好の機会を、妹が棒に振るとは普通は思わないだろう。事実テセアラの顔に浮かぶのも怒りではなく、純粹な不可解さだけだ。

「……」

「ひょっとして私、何か嫌われるようなことしましたか？」

テセアラの顔が不安に歪む。奈々華の心に罪悪感が去来する。

自分はひどいヤツだな、と思った。彼女は恐らく、とても人の良い子なのだろう。奈々華の拒絶に怒るでもなく、むしろ真っ先に自分に非があると考えてしまうほどに。そんな子を傷つけていると思うと自己嫌悪を覚えそうになる。でも……でもこれだけは譲れないんだ。

「そうじゃないんだ。そうじゃ」

「じゃあ……」

お兄ちゃんが悪いんだ。お兄ちゃんが八方美人だから。そのくせ私に一番優しいから。

「私もお兄ちゃんが好きなんだ」

「え？」

テセアラは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている。

「うつん……愛しているんだ。世界で一番」

失礼な気がした。自分だけ本心を打ち明けないで、人の恋路を邪魔しようというのは。

負けたくないとも思った。堂々と打ち明けられないほど自分の気持ちちはちっぽけなものではない。事情なんか関係ない。好きだと言う気持ちで負けるのは我慢ならないんだ。

「でも……でもあなたたち兄妹なんでしょ？」

「それが何？」

高揚を抑えきれず、挑発的な口調になる。誰にも告げたことのない、もちろん兄も知らない自分の本心を話す。誰かに話すということは兄に伝わるという可能性も生まれるということ。でももう後には引けない。

「お兄ちゃんがいるから生きていける。弱い私はあの人がいないと何も出来ない。でもそれは嫌じゃない…お兄ちゃんの優しさは私だけのもの」

「……」

「テセアラさんがどれほどお兄ちゃんのことを好きかは知らないけど…私は仁君のためなら命だって惜しくないよ」

嘘じゃない。兄が車に跳ねられそうになった時、身を挺して庇おうとしたこともある。結局兄に庇い返されて、兄は数メートル宙を舞うことになったが。血だらけの兄が「危ないじゃないか」と泣きじやくって自分を抱きしめてくれたのを覚えている。

「……」

テセアラは困惑した顔をしているだけで、何も言葉が出ないようだ。奈々華の気迫に気圧されたのか、あまりに予想外の出来事に頭がついていけないのか。

「…とにかくね。あなたの手助けは出来ないの」

テセアラに背を向けて歩き出す。まだ興奮しているのか、腐葉土がフワフワしているからか、地に足が着いていないような気がした。変わり映えのしない雑木林の緑が、心なしか行きよりも濃くなっているように見えた。

友人

鬼頭本線とは、首都天鬼京から近畿地方までを結んだ長い鉄道で、自分達と同じように巡礼目的から利用する者が大半だという。確かに客層を見ると年配の人間や、いかにもテングルに傾倒していますといった身なりをした人間が目立つ。兄が極右だ、極右だと騒ぎ立てるものだから肝を冷やした。普段は賢いのに、時々信じられないほど何も考えずにものを言うのは兄の悪い癖だ。

「テセアラ、何か元気がなかったね」

兄が妹にはたかれた頭をさすりながら、独り言のように言った。今日は特にやるべきこともないらしいので、休暇を取って天鬼京まで足を運びたい旨テセアラに伝えたそうなのだが。

「…気になるの？」

「まあ。報告はそれほど予想外のものでもなかったはずなんだが……」
兄はしゃべりながら、キョロキョロと車内を見回す。車内、及び性能も新幹線に酷似しており、それほどもの珍しいこともないはずなのだが。

「……」

「やっぱり、俺との仲を疑われたことと関係あるのかな？」

「……」

さて、どう答えたものか。テセアラの想いを兄は完全に確信しているのか、否か。

兄がタバコを取り出すと、慣れた手つきで火をつける。顔からは何の感情も窺えない。

「…お兄ちゃんはどう思ってるの？」

墓穴を掘らないように慎重に尋ねた。なんだか結局テセアラに協力しているようにも思えたが、兄の返事がどうあれ本人に伝えてやるつもりはない。

「…いい娘だと思うよ。遠慮深いし、器量もいい」

車内アナウンスがどこかの駅にあと何分かで到着することを告げるのが聞こえた。

「じゃあ…じゃああっちがもし、もしも告白してきたら？」

自分が兄の顔を、穴が開くほど見つめているのに気がついたが、視線はそらせなかった。

兄は相変わらずの無表情でタバコの煙にわずかに目を細めた。

「どうだろうね。あの子は俺の良い部分しか見ていない。告白を受けたとして双方いいことにはならないかもしれないな」

「……」

「それに、付き合うとなれば遠距離恋愛どころか…異世界恋愛なんて」

初めて兄が歯を見せた。

「そっか…よかった」

心からそう言った。今のところ兄はテセアラと付き合うことには積極的ではない。緊張で乾いた喉を潤そうと水の入った紙コップに手を伸ばすと、電車は先ほどアナウンスのあった駅に停車した。鬼瓦駅というらしい。いちいちいかついな、と思った。

「なんで良かったんだよ？」

「え？」

やつと自分の失言に気付いたと同時に、汗が噴き出した。

まずい。何かそれらしい言い訳しないと。自分の思いに気付かれてしまう。今はまだそのときじゃない。軽蔑されるかもしれない。

「そんなにあの子を嫌うこともないだろう？」

兄がまた車内をちらちら窺いながら言う。どうやら兄は奈々華が、気に入らないテセアラと自分が懇意になるのを嫌がっていると思われるらしい。

「……」

「まあいいけどな。さあお迎えだ。行くぞ」

「え？」

兄は急に立ち上がると、発車したばかりの車内を歩き出した。

兄が向かう先には黒髪の少女が、兄に向かって控えめに、しかしどこか嬉しそうに手を振っていた。おかっぱに切りそろえた髪とパツチリした瞳に、柔らかそうな頬。日本人形みたいに愛らしい女の子だ。

「厄日かな……」

立ち上がろうとしたが、電車の揺れと虚脱感で再び座席に倒れ込んでしまった。

病氣

少女の名前は天野^{あまの}ユキというらしい。歳は奈々華と同じ十四だそう
だ。

「兄とはどういったご関係で？」

少し口調もぶっきらぼうになる。自棄を起こしているのかもしれない。なんなんだ。どうして兄の周りにこうも女の子が集まる。樹液でも出しているのか。

「ほう、この娘が…」

奈々華を見るなり、天野は目を細めた。値踏みするような視線だ。
テセアラのときと同じだ。

「兄との関係は？」

「童が呼んだのじゃ」

「わらわ？」

時代劇がかった口調だ。変なヤツなのかとも思ったが、よく考えればこちらの現地人と話す機会はそう多くはなかった。ひよっとするとそうおかしな口調でもないのかもしれない。

「この子は特殊な環境で育ったんだ…まあ病気みたいなもんだ」

「病気とな？失礼極まりないぞ」

兄の言葉に憤慨する様子は、十四歳にはとても見えず、せいぜい十
歳前後に見える。兄は苦笑を浮かべて、天野のおかつば頭を撫でる。
「兄から離れてください」

「理不尽な！撫でてるのは仁であろう？」

「仁？呼び捨てですか」

怒りが沸々と湧いてくる。頭を撫でられるのは自分の特権だ。名前
を呼び捨てするのは相手を敬っていない証拠だ。兄は奈々華の不機
嫌を悟ったのか、頭から手をどけてポケットをまさぐって…タバコ
を取り出しかけてやめた。

「わらわは教祖として目下の者にへりくだることは出来んのじゃ」

「教祖？」

「奈々華ちゃん、奈々華ちゃん」

「何？てか教祖って？」

また病気が発症したのか？苛立ちと急展開に思考がついていかない。
「その子はテングル教会第四十三代教祖様だ。あと切符なくした」

ギヤイギヤイ騒ぐ一行をよそに、電車は時刻どおり運行し、天鬼京駅に十三時きっかりに着いた。天鬼京駅はかなり大きいが、東京ほど複雑に多数の電鉄会社の電車が入り組んでいて、おのぼりさんは必ずピヨピヨするなんてことはなさそうで、数本の線が案内表示に示されているだけだった。その中の天鬼京線という公営線らしき電車を乗り継いで数駅で、

目的地の天鬼殿駅に到着するらしい。

「でもどうして教祖が？第一敵の本陣に乗り込むような真似して大丈夫なの？」

「オールオツケーだ！それよりどうする？やっぱキセルか？」

「やっぱって何、やっぱって」

冗談だよ、と笑って兄が駅員に近づいていく。心配だからついて行くこうとすると、天野に袖を引っ張られた。天野は奈々華より十センチ近く小さいので見下ろす格好になる。

「そちは何も聞いておらんのか？」

「何を？」

「聞いておらんならそれでよい」

兄が何も語らなくてもさほど気に留めないのに、この少女に秘密にされると何か釈然としない。清々しいほどのえこ贔屓だな、と思う。

「いずれわかる」

いずれっていつだ？そもそも兄を呼んだのは何のためだ。二人の様子から、今日初めて会うわけではないようだが。聞きたいことが山ほどある。詰問してやろうと口を開きかけたが、兄が小走りに戻っ

てくるのを見て、口を噤んだ。

名残

「電車というのは面白いな！」

教祖様は電車がお気に召したらしい。奈々華にとっても地下鉄というのは馴染みがあるが、路面を走る電車というのは新鮮だった。だが天鬼様の尊顔を車両外面に等間隔でペイントしてあるのだから、気持ち悪いの一言に尽きる。内装は奈々華の知る電車とほぼ変わらないのが救いだ。

「それは良かった」

兄は嫉妬する気もおきないほど、優しい目をしていた。異性と言うより、可愛らしい子供を見るような目だからかもしれない。

「わらわは…不自由をしてはおらんが、対等な態度で接してくれる者はおらん」

「…そうか」

「だから主のような人間は…」

「お兄ちゃん！見て見て。あれなんだろう」

窓から見えるのは、いつか見た天鬼の彫像だった。夢に出てきそうなほど大きい。羽根の細やかな造りといい、厳しい顔つきといい、非常に完成度の高いものだったが、それだけに何とも嫌悪感を抱かせるものでもあった。

「ああ、大天鬼像だよ。各地の彫像はあれを縮小したものだ」

奈々華の肩に手を置いて、兄が振り返りながら言った。兄の瞳にガラス窓が映る。

兄を挟んだ向かいの天野が不機嫌そうに鼻から息をもらすのが聞こえた。

テンプル教会本部は一階建てのようだが、馬鹿みたいに広がった。昔の内裏とはこんな感じだったのだろうか。何せ全貌が地上からでは見渡せそうにない。せいぜい見えるのは純和風の庭園と、その遥

か奥にある、漆塗りの黒光りする巨大な門扉だけだ。

「ここまでで良いぞ。どうする…入っていくか？」

「どうする？」

兄がやはり庭園内を縦断する、小麦色の縄を踏みしめながら奈々華を見遣る。

「うーん、特に興味ないかな」

これ以上天野といても何のメリットもない。

「そうか」

天野が少し寂しそうな顔になる。大人げないが、他の何よりも兄と二人の時間が優先される。

「ていうかその縄踏んじゃダメなんじゃなかったの？」

「ああ、いいんだよ。信者の中でも知らない人間も多い、古い慣習だからね」

兄の尻を蹴飛ばす小気味よい音が辺りに響いた。

「あの子も嫌いかい？」

兄が出来の悪い子供を見るように、生暖かい目を奈々華に向ける。

「そうだね…あんまり」

「どうして？歳も同じなんだからお友達になれないか？」

「無理だね」

自分から兄を奪う可能性のある人間はすべてからく敵だ。正面を向きなおした兄が左手で頬をかいだ。巡礼目的の信者たちが列をなして自分達とすれ違っていくのが兄の体越しに見える。

「まあ…こういうのは強制出来るもんでもないしね」

「気になるの？」

「まあね」

「どうして？」

どうして？あの子のこと好きだと言ったら、ロリコンと罵ろう。

「俺の目的にはあの子を助けることも含まれているからね」

大方予想通りの答えだ。この兄は人がいいというか、お節介という

か…

「私があの子と友達になることが、あの子を助けることになるの？」

「いや…そういうわけでもないんだが」

齒切れの悪い兄にも、あまり不満は湧かなかった。

名残（後書き）

何気に累計ユニークアクセスが千人目前まで来ていると知り、驚いています。

こんな駄文を読んで下さる心優しい方がいらっしやるのは本当に感謝感謝です。

もし誤字脱字、感想・批判ありましたらお気軽にご一報下さい。

神愛

再び天鬼京線に乗って、天鬼駅まで戻るとそこから天鬼鬼山線という、これまたおどろおどろしい電車に乗り込んで、東北地方を目指すことになった。折角東京まで出てきたのだから、山梨のベースに一旦戻るのは手間になると判断したためだった。

「なかなか快適な部屋だね」

鈍行の寝台列車は初めてで、奈々華はときどきしてきた。二部屋取ろうとする兄を押しつけ、一部屋で頼んだ自分の機転を褒めちらかしたい気持ちにもなった。

「どうすんだよ。ベッドが一つしかないぞ」

押しのけられたとき、受付窓口のガラスに強かにデコを打ちつけた兄は少し不機嫌に見えた。

「いいじゃん、兄妹なんだから一緒に寝れば」

「……」

酔っ払いみたく赤くなっているであろう顔が見えないように、部屋の窓に張り付くように外を眺めた。東京、天鬼京から数十分離れただけなのに、もう田園と山々しか見えなくなっていた。テングル教指定の黒っぱいローブを半袖にした老人が農作業をする姿がゆっくりと流れていく。

「俺は簡単に言えば二重スパイなんだよね」

安っぽいソファーに深々と腰掛けた兄が他人事のような調子で言った。

「二重スパイ？ テングルと千人会の？」

「そ。だから天野とも親しかったわけだ」

兄が多くの子と親しくなっている元凶とも言えるわけだ。

「あの子を救うっていうのも関係あるの？」

鋭い、と指を鳴らした兄だったが二の句を次げず、押し黙ってしま

った。言つのを躊躇っているというよりは、言葉を選んでい
う感じだった。

「俺はこっちに呼ばれたあと、しばらくは千人会のために動いてた
んだが…ある日天野が突然現れて、色々あって友達になったんだ。
そしてあの子を取り巻く状況を知った」

「……」

無言で先を促す。兄は知ったのは偶然だったんだけどな、と前置いて

「あの子は…後三日で暗殺される」

剣呑な言葉に表情筋が強張るのを感じた。三日後にあの少女が暗殺
される…

「あの子は若さも手伝ってか、臣民の情報統制や教えの名目で課さ
れる掟を緩和しようとしたんだ。それが教内部の保守派の逆鱗に触
れた」

身振り手振りを交えてコミカルに説明しているが、兄が怒っている
のは手に取るように分かった。引き攣ったように頬を歪めているが、
目は笑っていない。

「どんな組織でも長く権力を持つのは、決していいことばかりじゃ
ない」

「あの子は…天野さんは知ってるの？」

「気丈に振舞ってはいるが、毎日恐怖に怯えているはずだ」

膝の上で組んだ兄の手が少し震えているのに気が付いた。こんなこ
とならもう少し兄と一緒にいさせてやれば良かった。自分を罵りた
い気持ちで胸が熱くなる。

「でも…でもあの子は俺が助けてやるって言ったら…笑ったんだ。
分かったって。

ありがとうって」

兄はもうほとんど涙声だ。奈々華の視界も怪しくなってきた。

この優しい兄が、死に行く運命の少女を、友と呼ぶ少女を見捨てら
れるはずがない。

「だから俺が絶対助けるんだ。例え人々が平和に、心豊かに暮らせている世界を壊すことになっても……君を巻き込むようになってしまったのは本当に申し訳ない」

「……」

「だって子供が犠牲になる宗教なんてクソ食らえだ。子供が泣いている社会なんか最悪じゃないか！」

本当にどうしようもなく優しい人。世界よりもたった一人の友達のために命を懸ける。

それはあなたにしか出来ないこと。だからこそ私はあなたを愛している。

狂おしいほどに愛おしい優しさ。奈々華が応えない道理は何一つない。

「水臭い。怒るよ？」

奈々華の言葉に、仁は涙でくしゃくしゃになった顔を笑顔に変える。心からの感謝と愛情が伝わってくる。

鼻水を垂れ流しながら笑う醜い顔を、世界で一番キレイな笑顔だと思った。

同衾

ちやうど自分達がいた世界の仙台にあたる場所に千人会東北ベースキャンプはあるらしい。

ちなみにそこに着くのは予定では、本日から明日にかけてのことらしい。今が午後六時を過ぎた頃だから、四時間くらいで仙台に到着し、レンタカーを借りてそこから二時間。

「けどあと三日しかないのに、戦力調査なんて悠長なことやってていいの？」

タイムリミットは三日。とても往復で半日以上かかる行程に割く時間はないのでは？

「ああ、あそこには秘密兵器があるんだ」

「秘密兵器？」

「姿が見えなくなる装置だそうだ」

「へえ、すごい」

それがあればとても有利にことを進められそうだ。本当に科学技術に関しては自分達のいた世界より数段進んでいるようだ。兄がソフアーの上でまだ赤い目をこする。

「まあ二重スパイの件を知っているのは勅使河原さんだけだから、ポーズもかねてそつちも

やるにはやるけどね」

「へえ、テセアラさんは知ってるんだ…私は今まで知らなかったのに」

仕方ないこととはいえ、少し嫉妬してしまう。兄が苦笑しながら奈々華の頬を指の腹で撫でた。そんなに膨れるな、と悪戯っぽく笑う兄を見ると簡単に毒気を抜かれてしまう。

「ねえ、もし私も命を狙われるようなことがあったらお兄ちゃんは助けてくれる？」

隣で少し距離を開けて横たわる兄の後頭部を見ながら、何となく尋ねた。

「まあ、そんなことになれば相手は半殺しじゃ済まないよね」

くぐもった声が返ってくる。返事は予想済みだ。ただ確認したかっただけなんだから。

「俺のかわいい、かわいい妹に茶々入れるようなバカは死刑以外ありえんよ」

こちらに体ごと向き直った兄が優しく言った。胸がぽかぽかと暖かくなる。

尺取虫よろしく兄の胸まで体を動かし、抱きついた。

「でもどうしてお兄ちゃんが呼ばれたの？」

この際だから疑問に思っていることを尋ねてみよう、と思った。硬い胸板に頼ずりする妹の頭を、仁が子猫にするように優しく撫でる。それだけでとろけてしまいそうになる。

「言ったろう？お兄ちゃんの若さとパワーだよ」

最初に冗談を入れなければこの人は本音を話せない。黙って二の句を待った。

「…今回は必要なさそうだが、いざと言うときその戦闘力を期待されてのことってのは本当だ」

「じゃあ天野さんがお兄ちゃんと仲良くなったのは？」

興味半分、嫉妬半分。もぞりと兄が仰向けになってしまった。

「それは君を呼んだ理由とも関連する…聞きたいか？」

言いにくいことなのだとは分かった。自分への配慮か、天野への配慮かは無表情な横顔からは読み取ることが出来ない。

「うつん、まあいいや」

無理に聞き出すことは奈々華としても本意ではない。それは自分の兄への信頼に対する冒涇だとさえ思っている。兄が再び自分の頬に手を伸ばした。

「もう寝るよ」

と笑いながら言う兄の言葉はついに実現されることなく、じゃれつ

く妹の相手を二時間以上することになるのだった。

蛍光

「勅使河原教授！」

見慣れた金髪をポニーテールにした少女に、兄は気まずさなど微塵も感じさせない足取りで近づいていった。テセアラは対照的に、兄を見て表情を曇らせる。

「早かったですね。交渉は上手くいきましたよ」

恐らく例の秘密兵器の貸し出しのことだろう。仕事の話から入るのは気まずさからか。

「さっすがテセアラ氏。出来るなあ」

自然体なのは兄だけで、奈々華もテセアラと目が合わないように注意してしまう。

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ明日早速戦力調査に行くか？」

「ええ、今日はもう休んで下さい」

テセアラとほんの一瞬目が合った気がした。しかし次の瞬間にはテセアラは自分のテントに歩き出していた。

千人会東北ベースも、今まで寄った他二つと変わり映えのしないテント群が軒を連ねているだけだった。違うところといえば東北地方らしい夜の肌寒い空気ぐらいか。奈々華はテントの入り口から覗く暗闇に思わず身震いした。

「もう休めって言われてもね？」

車内で体を休めていた自分と兄は眠くはないのだが。後ろを振り返ると、兄が安らかな寝息を立てて寒そうに体を丸めていた。

「何でねれるの？」

幸いなことに千人会東北ベースの近くには河原があり、夜闇の中に光る星の光を反射して川の流れがキラキラと輝いていてとても幻想

的で、眠れない奈々華の心を楽しませてくれた。

河原のごつごつした岩の上に腰掛け、ぼんやりと星の輝く夜空と、さらさらと流れる川の水をぼんやりと眺めながら思った。

この世界は、今見えている自然の光景も自分のいた世界となんら変わらないのに……この世界は異世界で、宗教が支配する中人々は純朴で、今日出会った少女の犠牲で変わらずに回り続ける。何もかも現実感が湧かず、夢なんじゃないかとさえ思ってしまう。

でも、兄が言った。

革命を起こす……少女を助ける。子供が泣いている社会は最悪だ。

「眠れないんですか？」

弾かれたように振り返ると、女声の主、テセアラ・バーンが立っていた。

「仁さんは不思議な人ですね」

テセアラも奈々華の隣の少し小さめの岩に腰掛ける。星の光に金髪が映える。

「どうして？」

「一見ふざけているように見えて、実は色々と考えている。過激な発言もするくせに、実際はそんな気はなくて……それどころか誰よりも人に遠慮しながら、思いやりを持って接する」

「そっかもね」

昼行灯という言葉が頭に浮かんだ。だがそんな一言で片付けられるほど、兄は単純ではないことも知っている。

「あ。ホタル」

テセアラの指差す方向を見ると、川辺をゆらゆらと黄緑色の光が浮いていた。隣を見るとテセアラは無邪気に顔を綻ばせている。

「お兄ちゃんとさ、昔ホタルを捕りに行ったんだけど結局見つからなくて……お兄ちゃんに怒っちゃったことがあったんだ」

今思えば随分と理不尽なことだ。東京の少し山奥に行ったところで見つかるはずもないのに。

もつと水のきれいなところに行かないと、いないんだよと兄が慰めてくれたのを思い出す。

「……」

「でも次のお休みにお兄ちゃん、一人でどこかに出掛けてさ…帰って来たらホタルを虫かご一杯に捕まえて…どうだ！って私に見せたの」

ホタルが遠くに飛び去り、辺りはまた星の光だけが頼りの薄暗い夜の帳に支配された。

「でも実際に見るとホタルってゴキブリに似ててさ…今度はどっかやってって泣いちゃったの。お兄ちゃんはどうがなから友達にあげるって出て行ってさ」

知らず自分の顔が綻んでいるのに気付いた。隣のテセアラも微笑んでいた。

「…当時中学生だったお兄ちゃんは一度も怒らなかった」

何でこんな話をしているのか分からなかった。ひよっとすると兄の良さを分かち合いたいと思ったのかもしれない。夜風が火照った頬に気持ちよかった。

計画

伊達政宗像も、牛タン弁当もない仙台駅周辺は、他の都市と変わらず人々がのんびりと昼下がりを満喫している。広場には天鬼像が立っていて、他の都市との見分けはますます難しい。

「思ったんだけどさ……ここはどこもご当地色がないよね」

「そうだね。画一的な都市計画の賜物ってね」

情報統制、都市計画。あらゆるところにテングルの影が見え隠れする。それでも、往来を行く人々は穏やかな表情で、存分に自由を享受できないことに不満をもらす者はいない。いや、比較対象がないのだから自分達が不自由だと思ふこともない。

「早く終わらせましょう」

黒いローブに身を包んだテセアラが急かす。どういった風の吹き回しか彼女は今日に限って、テングル教徒の格好に身をやつし、自分達について来たのだ。兄に聞くといいよだからね、と曖昧な答えが返ってきただけだった。

「了解。しかしどいつもこいつも行ったり来たり……働かなくていいのか？」

「お兄ちゃんがそれを言う？」

労働力の低さはアジアでも五本の指に入ると日頃豪語している兄には言われたくないだろう。

「よし！終わった」

兄が嬉しそうに両手を天に突き上げた。

作戦の概要はこうだった。

まず天野との交友がある仁と奈々華が、テングル教会本部奥まで進み、天野と合流。例の秘密兵器を使って姿を消したテセアラは天野暗殺の決定的証拠を掴んで、三人に合流。

仁が暗殺首謀者、木原きはらという男を捕まえる。そしてその犯行の全容

を暴露する。

「何か随分簡単そうだけど、大丈夫なの？」

緊張感のない兄の説明のせいもあってか、いまいち精確さに欠けるような気がした。

「そうですね。一応抜かりはないはずです」

「もっとしっかりしろ。君にかかっていると言っても過言じゃないんだよ」

兄がふざけた調子で、奈々華を指差す。

「私？」

「そう、君はテングル教会次期教祖のテストを受けに来たってことになるんだから、相手を油断させる大事な役目なんだ」

「はい？」

私が？次期教祖？相手を油断させる？

「どうしてそういう大切なこと黙ってるかな？」

言葉ほどには責める気は起きない。本当に反省しているのかしよんぼりとした様子で、上目遣いに自分を見上げる兄が可愛くて今すぐ撫で回したいくらいだ。

「だって言いにくいだよ？」

全く。連れて来ておいて今更遠慮してもしょうがないだろうに。恐らく自分が協力を拒めば、兄は強要することもなく、少々無茶でも強行突破して天野を助けるつもりだったのだろう。

「私からもその件については謝ります」

奈々華が本気で怒っているとも思ったのか、テセアラが深々と頭を下げた。

その姿が可笑しくて、兄と奈々華は二人して笑ってしまった。

三人

今から不安になってもしょうがないとは思いつつも、自分のやることを考えると心は穏やかではいられなかった。奈々華は作戦当日テングル教指定の（初めて名称を聞いたところ天鬼衣てんぐゐという安直さだった）ローブに身を包み、兄に連れられて、教祖及びそれに準ずる一部の人間しか立ち入ることを許されない神聖な間に通され、そこで天野含め数人の幹部から、次期教祖に相応しいかのテストを受ける。

「大丈夫、ミスったらお兄ちゃんが全員鉄拳制裁するまでだから」行きと同じように同室の兄が快活に笑った。それが不安なんだが。出来る限り穩便に済ますには、やはり自分がしっかり責務を全うするしかないさそうだ。

「まああまり関心はしません」

二人しかいないはずの室内に、第三者の、テセアラの声がする。

「やっぱり慣れても不気味だな」

兄がソファアのやや上に向かつて、タバコの煙を吐き出す。途端にゴボゴボとテセアラの咳払いだけが聞こえてくる。試験を兼ねて既にテセアラは姿を消す薬を飲んでいる。薬を飲んだ人間に当たる光を屈折させるらしいが、詳しい原理なんかは説明を聞いたものの、奈々華にはちんぷんかんぷんだ。

「全く…今度やったらくすぐりますよ」

テセアラの声が聞こえたかと思うと、兄が身を振りながら笑い出す。

「はは、やめ。ははは、もうやってんじゃん」

傍目からは兄が珍妙なダンスを踊っているようにしか見えない。兄がタバコを取り落とし、ズボンに穴を開けるまで笑い声は絶えなかった。

「上手くいくといいね」

ズボンの焦げ目をさすりながら、兄が不意に真面目な声を出した。こういうところがテセアラをして掴みどころがないと言わしめるのだろっな、と思った。

「そうだね」

「そうですね」

二人の声はほぼ同時。天野を助けるという気持ちもさることながら、二人は魅せられているのだろっ。子供のように単純で、優しくて強い兄の気持ちに。

奈々華の責任。革命という社会変動が巻き起こるかも知れない。千年近く続いたテングル教の体制を覆すことになるのかも知れない。それに手を貸そうとしている。

不安が払拭されたと言えば嘘になる。それでも兄のために、兄が喜ぶ顔を見るためにやるんだと思うと少し力が湧いてくるような気がした。

「そろそろだな」

窓から見える景色は変わらないが、着実に列車は天鬼京に近づいている。車内アナウンスが、間もなく天鬼京に着くことを告げるとともに、列車の窓に天鬼京の街並みが見えてくる。相変わらず巡礼目的らしき、天鬼衣に身を包んだ人々が、忙しなく街を行き来していた。

隣を見ると、兄の真剣な横顔が目映る。テセアラも兄を見ているような気がした。

上手くいくといいねと、心の中で兄にもう一度語りかけた。

中心

天鬼京駅から車で二十分ほど走ると、昨日見た天鬼教本部の大きな建物がいやが応でも視界を覆った。厳かな雰囲気 of 建物は昨日よりも少し、恐ろしく見えて手に汗が滲む。

しかも車中では、いつもは饒舌な兄も緊張しているのか、誰も何も喋らない。

いやな沈黙がかれこれ二十分は続いていて、もう目的地に着くまで誰も話さないと思っていたが、

「ちよつとこのボタン押してみ？」

突然兄が左手の甲のほくろを助手席の奈々華に向ける。やはり雰囲気のを和ませるのは兄だ。

奈々華が訝しみながら、そのほくろを人差し指で押すと、ブツという破裂音がした。

兄は満足気に笑っているが、奈々華は無言で窓を開けるだけだった。

「ここからは何も話さないでね」

先ほどの悪戯といい、兄は落ち着いているように見えた。これから敵の本拠地に取り込むというのに。黙って奈々華は、テセアラも恐らく、頷いた。

長い庭園を俯いて渡り、黒い門扉を目線だけ上げて確認した。近くで見ると扉は一枚の板から削り出されたもののようだった。まるで犯罪者だな、と思いながらもこれからやることを考えると堂々としていることは出来ない。

「城山が例の少女を連れてきましたと、木原氏にお伝え願えますか……」

「わかりました。少々お待ち下さい」

門扉の前に配備された男の一人が応対する。門扉がギイと大きな音

を立てて開く。

男はその奥に消えていく。顔を少し上げて門の先を窺うと、砂利を敷かれた中庭のような空間のさらに奥にヒノキの縁側が見えた。もう少し顔を上げると、段差になった縁側の上を同じようにヒノキで出来た廊下が横長に伸びており、それに沿って障子が張り巡らされている。障子の奥はさしずめ応接間か。自分の家の何倍だろうか、奈々華は思った。

「テシーちゃんはもう行ったみたいだね」

馬鹿みたいに大きな廊下を、勝手知ったる我が家といった風に迷いなく兄は進む。

「ああ、もう喋っていいよ」

びたりと着いて歩く奈々華を振り返って微笑を見せた。

「大きいね」

「まあ仮にも、宗教だけじゃなく政治も司る組織の本拠地だからね」

「……いきなり木原って人に会うの？」

いきなり黒幕と会うなんて聞いていない。こちらにも心の準備というものがあるのに。

「まあ……ね。でも木原だけと会うわけじゃない」

兄が廊下の角を曲がる。どうやら四角い建物を堀のように廊下が囲っているらしい。

いくつか障子の閉じられた部屋があったが兄は見向きもせず、四角い廊下を闊歩していく。

入り口から一番遠い辺の廊下の丁度中間あたりの、奥まった一際大きな部屋の前で兄は遂に足を止めた。振り向いた兄の真剣な顔に、いよいよだと気を引き締める。

「城山です。例の少女を連れて参りました」

「どうぞ」

中からくぐもった低い声が返ってきた。

敵地

きはらゆついち

木原悠一は、みたところ四十代前半の男で、短く刈り上げた黒髪と大きな瞳に薄い唇をした二枚目だった。だがその整った顔立ちと精力的な双眸からは冷たい印象を受けた。自分とは相性が悪そうだとも思った。

「まあかけたまえ。もう少ししたら準備は整う」

優しいさの欠片も感じられない声に聞こえるのは先入観のせいか。

「恐れ入ります」

兄が座るのを見て、なるべくフードが浮かないように気をつけながら奈々華も木原の対面の座布団に腰掛けた。柔らかい肌触りからこの座布団も安物ではないことを教えてくる。

「その少女が…天野様の仰った？」

「ええ」

探るような視線はこちらに来てすっかり慣れたものだった。

「天野様と同じ歳だと聞いたが？」

「そうです。今年十四になります」

不意に思った。まだ十四歳の天野が後継を選ぶのは常識的に考えておかしい。自分達は天野がこのままだと目の前の木原に暗殺されると知っているが、普通は十四の子供が今すぐにどうこうなるとは思わないんじゃないか。仮にそれがテングルの慣例だとしても、天野の後継だというのだから彼女より若い子供を選ぶのが筋ではないのか。

その時、障子が開いた。奈々華と同じくらいの少女が遠慮がちに両膝をついている。

「木原様、城山様…準備が整いましたので」

部屋を出て、縁側を降りるとまた砂利道が続いていた。顔を上げて

その先を見遣ると真っ白い壁に真っ白の瓦屋根の庵が見える。敷地の最奥に位置するその建物。兄が言っていた神聖な間というのはあれのことだろう。ときどきと心臓の鼓動が耳の奥で大きく響いた。左手に温かい感触がして、そちらに目を向けると兄が手を繋いでくれている。そんなに不安そうな顔をしていたのか、と右手で顔を撫でるが、そもそもフードを目深に被った奈々華の表情が見えるはずがない。敵わないな、この人には。右手に顔の筋肉が緩む感触がした。

庵の中も外装同様に真っ白い壁紙に覆われていて、部屋の奥に立つ天野の白装束が壁と同化しているように見えた。表情なく佇む姿に、先日見た同年代の少女の面影はない。

「よく参られた」

「……」

兄の手の感触が不意になくなる。顔を上げると兄は寂しそうに微笑んでいた。

「神聖な儀式だからね。ここからは奈々ちゃん一人だ」

言い終わると、兄は木原とともに庵の白い扉を開けて出て行ってしまふ。奈々華は初めて幼稚園に行った時、母が手を離して同じように申し訳なさそうに笑っていたのを思い出していた。

「そう固くなることはない」

天野が気遣ったような声を出す、空っぽになった左手を握り締めると、奈々華は再び心臓が締め付けられるのを感じた。

天野

「だから固くなることはないと言っておろう？ここには監視カメラも盗聴器もない」

破顔した天野を見て、やや心が軽くなるのを感じる。

「…テストって本当にやるの？」

「やりたいか？」

「……」

天野が一步、二歩奈々華に歩み寄る。

「主は処女か？」

「は？」

あまりに場違いな質問に言葉を失い、機械的に頷く。頷いて、兄に同じ質問をされたことを思い出した。兄も天野も一体どういった見でそんな質問をするのか。

「ふふ。教祖は純潔でなければ務まらない。異性と関係を持つことはその靈性を下げると考えるのじゃ。だから性経験がないことは第一条件じゃ」

「そんな…」

前時代的な、と言おうとしてやめた。

「その様子だと仁にも聞かれたようじゃな？」

「…うん」

兄は自分の次期教祖としての資格を問うためにあんな質問をしたのか。一人で浮かれていた自分の姿を思い出して顔が熱くなった。

「本当にあやつは食えんヤツじゃ。保険を打っていたか」

「保険？」

「ああ。わらわの救出に失敗したら、お主を教祖に立てて中からテングルを変革する気だったのじゃろう」

まったく、と天野は顔を顰める。そんな。救いたいと言った兄の気持ちは紛れもなく本物だ。

「でも…」

「わかっておる。あやつは失敗する気など毛頭ない。本気でわらわを救いたいからこそ、万が一のために、わらわの死を無駄にはしたくないのじゃろう」

「……」

「主もあやつに惚れているようじゃの？」

「え？」

心臓がどきりと跳ねる。どうしてわかったんだ。奈々華は少女を驚きの目で見つめた。今までこんなにはつきりと自分の気持ちを言い当てられたことはない。この子は自分が思っていたよりもはるかに鋭い。

「ふふ。心配せんでも誰にも言わんし、主の恋敵になることもない。わらわもあやつ性の根の良さを気に入っているのは確かじゃが、脈もない上…にわかには信じがたいが別の世界から来たそうじゃないか」

「うん」

そこで両者話すことがなくなって、押し黙る。白い部屋で白装束の少女と黒いローブの少女が奇妙な沈黙を作り出す。ふと自分は何でこんなところでこんなことをやっているんだろう、と思った。自分のいた世界にいた頃には、こんなことになるとは思ってもよらなかった。

「テストは終わりじゃが、何か聞きたいことはあるか？」

「え？これで終わり？」

自分の性経験がないことを確認して…あとは恋愛話をしていただけじゃないのか。

「そう。わらわが…前教祖が新教祖の霊性や人となりを確認できれば終わりじゃ」

「霊性なんて…」

言いかけて自分がよく不思議なことに巻き込まれるのを思い出した。

今だって自分がいた世界とは異なる場所において、一国の指導者と話をしていいるのだから天野の言葉を否定できない。

「ちなみにテストは合格じゃ…これでわらわはいつ死んでもいいことになるな」

自嘲気味に笑う姿からは、今度は歳相応の印象を受ける。死にたくないと言顔に書いてある。

「お兄ちゃんが全力になるわけだ」

ただでさえ子供に甘いのに、こんな顔を見せられては兄が動かないわけがない。

自覚がないのか、きょとんとした顔をした天野は嫉妬してしまいそうなくらい可愛らしかった。

急転

奈々華は不謹慎ながら、随分と心が軽くなるのを感じて舌も滑らかになってきた。天野も意外にもリラックスした様子で、とても余命一日の薄幸の少女には見えなかった。どちらも口にはしないが、多分彼を信じているのだ。きっと何とかしてくれる、と。

「でもさあ、どうして次期教祖を選ぶことにしたの？」

暗殺を助長することになるんじゃないか。さっき感じた疑問を何の気なしに聞いた。

聞いて後悔した。途端に天野の表情がみるみる曇っていったからだ。「脅されたのじゃ」

蚊の鳴くような声でそれだけを言って、天野は俯いてしまった。どうしてそこらへんの事情を詳しく話してくれなかったのかな、と奈々華は兄に内心で毒づいた。

「だ、大丈夫だよ。お兄ちゃんが何とかしてくれるって！」

天野が顔を上げたその時

ドーンという爆発音が聞こえた。

ビリビリと庵全体が振動するのを感じながら、奈々華は最悪の事態を脳裏に描いた。

天野が奈々華の横を走って、扉に向かう。その姿を見て、我に帰った奈々華も弾かれたように後を追って扉を出た。

大きな本殿の向こうに黒い煙が上がっているのを確認するとともに、うおー！という男声が乱暴に鼓膜を揺らす。鬨の声にひるんだ天野が隣で息を呑むのが妙にはつきり聞こえた。

どうしよう。どうすればいい。天野を守らなきゃいけない。でもど

うやって。

「てーへんなことになったのう」

聞きなれた呑気な声に振り返った。天野も振り返るのが目の端に映った。

天鬼衣を脱ぎ捨てて、無地の白いＴシャツに、黒いジャージ姿の冴えない男が立っていた。

右手には昏倒しているのか、力の抜けた様子で縄に縛られた木原を抱えている。

「お兄ちゃん！」

「テセアラはどこ行ったか分かんないけど、とりあえず殴つといた」兄は右手の木原に視線だけを送って、にやりと口の端を歪めた。

「どうしよう、お兄ちゃん。やつぱりこれって……」

「うん、バレちゃったみたいだね。参った参った」

「参ったではない。どうするのじゃ!？」

兄の雰囲気によつと緊張が解けたのか、天野が少し大きな声を上げた。とりあえずの危機は兄の右手に収まっているのだが、テングルと千人会の前面衝突が起こっているのは明白だ。

「決まってるだろう? 一番目立つところに行くんだよ」

「なんで?」

兄の考えがまるで掴めない。一番目立つところに行つてこの騒ぎは収まるのか。

「行けばわかるよ」

「仁さん!」

突然若い女性の声が聞こえた。びくつと全員が体を強張らせる。

「心臓が止まるだろうが! 証拠は手に入つたんかい?」

「はい、仁が部屋に来る前に木原とその腹心が話しているところをばっちり」

まだ薬の効果が消えていないのか、テセアラの声は聞こえるが、姿はどこにもない。

天野がきよろきよと狐につままれたような顔で、辺りを見回している。

「上出来だ」

「でもどうします？今は別働の部隊が食い止めてくれていますが……」

「ああ、めんどくせえ！とにかく俺について来い！」

そう叫ぶと兄は走り出した。大丈夫だ。兄を信じるのは妹の役目だ。戸惑ったように固まっている天野の手を掴むと、奈々華も兄の、いつもよりも力強い背中を追いかけた。

仁愛

中庭は既に戦場となっていた。

幸い力尽きて地面に倒れている人間は数人しかないようだったが、血を流しながら銃口を人間に向ける人間の姿が見えた。傷ついて倒れこむ人間を踏み越えて、敵陣に向かう人間の鬼気迫る顔が見えた。目が乾くのを感じて自分が瞬きをしていなかったことに気付いた。

「やめろー！！」

兄が大声を張り上げる。鬨の声にも怒声にも銃声にも負けない大きな声だった。こんなに大声を出している兄を見るのは初めてのことだった。

それでも、それくらいで一度動き出した集団が止まる筈もない。聞こえているのか、聞こえていて無視をしているのか、銃声はやまず、行進は止まらない。

怖くて目を背けたいのに、逃げ出したいのに、自分は留まってしまうこと、の成り行きを、人が人を殺す場面を見つめている。泣き出すのも、震えるのも忘れて地蔵のように固まっている。

いや、ひよつとすると自分は泣いているのかも知れない、震えているのかも知れない。

ガッシャーんとさっきの爆音にも負けられないような大きな音がすぐ近くでした。

兄が壺のようなものを廊下に叩きつけて、その音をマイクが拾ったのだと気付くまで数秒かった。マイクなんていつ取り出していたのかもわからない。

「聞け！！」

兄がそのマイクに向かって再び大声を張り上げるが、さっきの大音を間近で聞いているせいで鼓膜がバカになっていた。戦場の音より大きな声なのか、否か。

正面を向きなおすと、数人の戦士たちがこちらの様子を窺っているのがわかった。

「ああ、次期教祖が決まり次第、機を見て天野を殺す」

兄のものではない声がマイクに乗って、あたりに響き渡る。兄のほうを向き直るとマイクに何かの機械をあてがっている。自分の知るものと幾分形状が違うものの、テープレコーダーのようなものだとすぐにわかった。流れているのが木原の声だともわかった。

「でもどうするんです？死因とか」

「なあに。以前から体が弱いと公表している。病死ってことにすればいい」

既に集団の多数がこちらを向いている。まだ警戒して敵の姿から目をそらさない者もいたが、交戦は控えている。銃声も怒声もやんだ中庭は異様な静けさに包まれていた。

「これはテングル教本部経典顧問の木原悠一とその腹心の会話だ」兄が静かに言った。だが色んな感情を押し殺したようなその声には妙に力があり、人を惹きつけた。特に戦う意義を根底から否定されかけているテングル教徒達は、とり憑かれたように聞き入っている。

「だまされるな！そんなものは何とでも偽装が出来るじゃないか！」突然の第三者の声には聞き覚えがあった。ほんの数秒前まで流れていたテープの、木原の腹心の声だった。声変わりを迎えていないような、特徴のある高い男の声だ。

廊下の端を通って、中庭に飛び出す人の姿が目端に映る。落ち着いた声の雰囲気から大人だと思っていたが、背丈は子供ほどしかない。後姿しか見えないが、本当に声変わりしていない子供のようにだった。

「私達がそのようなことをする筈がない！」

聴衆たちの顔に困惑の色が浮かぶのが見える。どちらが正しいのか決めかねているようだった。

「わらわは、わらわは殺すと木原に脅された!!」

さつきまで隣にいた天野が、兄からマイクをひったくり、兄に負けない大声で言った。

目には涙が浮かんでいる。

「あんたら、それでいいのか？」

兄の声はやはり静かだった。マイクを奪われたことにも頓着した様子はない。

「こんな子供を犠牲にして、幸せに暮らせたとして…それでいいのか？」

聴衆は水を打ったように静まりかえっている。少年も教祖直々の訴えになす術を失ったのか、口をぱくぱくさせて成り行きを見守っている。

「そんながテングルの教えなのか？テングルの神はそんなに薄情なのか？子供一人救えないほど…そんな宗教ならやめちまえよ！」

兄の頬を涙が伝う。声も震えている。

「そうじゃないだろう!!そうじゃ…」

「確かにこの子がやろうとしたことは性急だったかも知れない。でもこの子はあるた達皆の幸せを願ってやったんだろう!!その報いが死ぬことだなんておかしいだろう！」

「この子を助けて…膿を取り除くべきだろう!!千人会に改宗しろなんて言わない!でも敵は千人会じゃないだろう!!」

涙で掠れる声をそれでも引き絞り、しゃがれたような大声で兄が叫び続ける。兄の顎から涙の雫が落ちたように見えたが定かではない。もう奈々華も涙で前が良く見えない。

「武器を捨てろ」

再び声を落として兄が言った。それでも聞き逃すような人間は誰一人おらず、金属が砂利にぶつかる鋭い音が一斉に響いた。

惜別

「主には感謝してもし足りぬな」

天野が天鬼教本部の、昨日木原と面会した部屋の上座に座りながら言った。テールを挟んでその正面に仁、両隣を挟むようにテセアラと奈々華が座った。

「あんなにぼろ泣きするとは思わなかったですけどね」

テセアラが兄を見遣って茶化す。出会った当初より幾分テセアラとも打ち解けたように感じていた。兄に対して同じ想いを抱く連帯意識のなせるわざかもしれない。

「お兄ちゃんは泣き虫なんだよ」

「そうかなあ…」

「良いではないか。本当に心が熱くなった時に泣けない人間より余程いい」

「それはそうですね」

兄は褒められて、むず痒そうに後頭部を掻いている。

「それに…あれは皆泣いてたしね」

兄の魂の慟哭とも呼べるような…心を突き動かす演説に、あの場にしたほとんどの人間は涙した。

「でも、あの一瞬でよくあんなにスムーズに演説出来たものですね」それは奈々華も気になっていた。もし作戦に暗雲が立ちこめてから、即興であんな演説を行うことを考え付いたのだとしたら、脱帽するしかない。

「ああ、あんなん勢いだよ」

「え？」

本当に感謝感激していたらしい天野が顔を強張らせる。

「しかし俺に任せろ、みたいなこと言っておったじゃろっ？」

「だから勢いで乗り切るから任せろってことだよ」

「な…なんと…」

いい加減な、と続くのだろう。奈々華もその意見には同意だ。隣のテセアラも開いた口が塞がっていない。

「あんなもんは考えてたってしょうがないんだよ。うじうじ考えてる間にも人が死んでいくんだぜ？」

実際に作戦を練り直していたら、三十余名の犠牲ではすまなかったかもしれない。だがあまりにも無計画が過ぎると思う。

「人も物も力を加えなきゃ、動かねえし止まらねんだよ」

「……」

演説の再演のように三人は黙って、兄の言葉を待った。もっと単純に、自分の想い人の思考に興味があるだけなのかも知れない。

「人の心を動かせるのは…人の心だけだ」

「しかし、念には念をつてやつだね」

兄が言っているのは、千人会の伏兵をテセアラが近くに潜ませていたことだろう。

「褒めてもらう資格は私にはありません…」

「気にすんなって。しょうがないことだよ」

天野を助けるという計画が露見してしまったのは、兄と奈々華がテセアラと共にいたという目撃情報からだ、木原の証言で分かっている。おそらくは仙台で天鬼衣を着ていたとはいえ、外国人丸出しのテセアラが通行人の目に留まってしまったのだろう。ちなみに木原とその腹心の少年（柳という名らしい）は現在、司法を司る天鬼宗教裁判所とやらでその処遇を検討中とのことだ。

「そうだよ。大丈夫だろうって根拠もなくゴーサイン出したお兄ちゃんが悪いんだから」

「まあな」

「褒めてはいないよ？」

三人が兄のとぼけた顔を見て笑った。兄もつられて笑った。

エピソード

よくわからない装置をテセアラが浮かない表情でいじくっている。天野も兄の傍で笑っているがその笑顔に翳りが見えるのは気のせいじゃないはずだ。

奈々華もはや二人を異世界に住む、自分とは関係のない他人とは思えず、気を抜けば泣き出しそうだった。

「準備は整いました…」

テセアラがゆつくりと、ゆつくりとこちらに近づいてきた。

「……そっか」

これでお別れか。こんな機械一つで私たちは今生の別れを迎える…親の仇を見るような目で天野がその装置を見つめていた。兄の無表情が無理をしていることを告げていた。

「泣いてはくれないんですね…」

テセアラの口調は責めるようではなく、ただただ悲しそうだった。「……」

「私は…出来ることならあなたの世界に行きたい。けれど…」

「それはわらわも同じことじゃ。しかし我々には使命がある」

新たな道を歩み出したテングル教国家。その中心を担うのは間違いなくこの二人だ。

「留まることは出来ませんか？」

テセアラはもはや懇願するような声音だった。天野も泣き出しそうな顔をしている。

「俺達は元々この世界の人間じゃない。元いた世界に帰るのが道理さ」

同じ想いを抱く身としては同情を禁じえない。これじゃあ生殺しだ。出会わなければよかったんじゃないかとさえ思えてくる。

「だけど、俺達は…友達だ。困ったことがあればいつでも呼べ。力

になる」

誰もそれ以上何も言わず、ただただ沈黙だけが続き、時間が流れた。

最後に見た二人の顔を奈々華は一生忘れないように心に刻んだ。

フランス人形のような西欧の美人。日本人形のような愛らしい美少女。

異世界にいる、決して交わることはない平行線ではあるが、確かに存在する友達。

右手に握った兄の手をきつく握りなおしながら、以前にも感じた浮遊感の中で奈々華は意識を手放した。

目を開けると、リビングの天井が見えた。

身を起こすと兄が見えた。虚ろな目でタバコをふかしている。

見慣れた我が家。見慣れた兄。帰って来たのだと思った。なんと声をかけようかと迷った。

兄が自分を異世界に連れて行った真意を尋ねようと思ったが、それは聞いていけないう気がした。また何となく分かっているような気もした。

兄は最初に異世界を見せてやると言った。だから決して自分本位ではなく、奈々華に何かを学ばせようとしたんじゃないだろうか。カタルシスのようなものを、啓蒙のようなことをしたかったんじゃないか。そしてそれは奈々華の心に起きた。

気が付くと兄はソファで寝息を立てて眠っていた。気持ちよさそうに眠る兄の手から短くなったタバコを取り上げると、灰皿に押し付ける。

「お疲れ様」

エピソード（後書き）

最終話までお読み頂いた方がいらっしやればここに感謝の意を述べさせていただきます。一応続編なんかも考えておりますので、機会があればまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5358h/>

兄の異世界譚

2010年10月11日01時10分発行